

会話における嘘の構成プロセス

13H2069 田口夢子

1. 背景と研究目的

私たちは、生活の中で嘘¹をつくことがある。相手から非難されないようにしたり、話を面白くしたりするために事実とは異なることを話す。取り調べや記者会見などの真実を話すことを求められる場面でも嘘をつき、その場をやり過ごそうとする人もいる。ニュースでも嘘は大きな問題として取り上げられることが多い。その際、嘘をついた本人に批判が集まる。しかし、嘘はその本人によってのみ作られたのだろうか。

これまでの嘘に関する先行研究は、目的別に嘘を分類するものや、嘘をつく際に表れる身体的特徴を明らかにするものが中心であった。こうした研究は嘘を当人のみの問題と捉えており、嘘が他者との会話のやりとりの中で生成されるという見方が看過されてきた。一方、浜田（2004）や、高木（2006）、森（2001）による記憶の共同想起に関する研究は、会話の詳細な分析から、誤った情報が会話の中でどのように作られるのかを明らかにしており、示唆に富む。これらの研究の知見をもとに、本研究では、会話の中で嘘がどのように構成されていくのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2016年8月9日、10日に弘前大学においてナビゲーション実験を行なった。ナビゲーション実験とは、実験参加者がある目的地まで移動し、その行動経過を後で別の人に伝えるもので、ナビゲーション段階、質問段階、振り返り段階の3段階からなっている。森（2011）の手法を参考にした。当実験では予備調査と先行研究から立てた仮説に基づき、嘘の出現に影響を及ぼすと考えられる2つの条件（「人間関係の近さ」、「将来の不利益の自覚」）による違いを設けた。実験の流れは表1に示した通りである。

表 1 実験の流れ

日付	2016年8月9日	2016年8月10日	
ナビゲーション段階	参加者A・Bがナビゲーション	参加者C・Dがナビゲーション	
質問段階	1回目(知り合いへの説明) 参加者A・質問者F 参加者B・質問者E	1回目(Cは不利益あり) 参加者C・質問者G 参加者D・質問者H	
	2回目(他人への説明) 参加者A・質問者E 参加者B・質問者F	2回目(Dは不利益あり) 参加者C・質問者H 参加者D・質問者G	
	振り返り段階	参加者A・Bがアンケート回答	参加者C・Dがアンケート回答

¹ 嘘は「自己が真実と思わぬ事柄を真実と思っているかのように他人に語ること」（中村，1982）と定義されている。

実験参加者は、9日に人文学部3年生の男性、教育学部3年生の男性の計2名、10日に人文学部3年生の男性女性各1名ずつの計2名である。これとは別に、人文学部の学生4名に実験を支援してもらった。実験支援者には、ナビゲーションの補助と質問段階での質問を担当してもらった。

ナビゲーション段階は、弘前大学文京キャンパスの敷地内で行なった。弘前大学の敷地内に目的地を3カ所(噴水、銅像、井戸)設定し、9日と10日の参加者それぞれに2人で探索してもらった。質問段階では、ナビゲーション段階で体験してきたことを、参加者から質問者(実験支援者)に説明してもらった。説明は各参加者とも、相手を変えて計2回行なった。参加者には、説明の中で嘘を2~5個つくように依頼し、質問者は体験全般に対し自由に質問をした。振り返り段階では、質問段階に関するアンケートに回答してもらった。

3. 仮説の検証

予備調査から2つの仮説を立て、検証した。その結果、第一の仮説「嘘がばれてもよい相手だと思い嘘をつく」は実証されたが、第二の仮説「嘘がばれた場合を想定できないから嘘をつく」は条件設定のミスで検証できなかった。

4. 嘘の会話文で用いられた戦略

本調査では、質問段階で出たすべての会話文のトランスクリプト(書き起こし)を作成し、嘘が用いられるときの会話の特徴(戦略)について内容分析を行なった。

嘘の会話と通常の会話で違いがあるかを探るために、嘘の会話文(全56エピソード)と通常の会話文(全39エピソード)を抜き出した。抜き出した全会話文の分析から、会話の中で9つの戦略が用いられていることが分かった。これらの戦略が用いられるか否かと、当会話が嘘か嘘でないかに連関があるのかをカイ二乗検定を行ない調べた。ただし、有意水準は5%とし、期待値が5以下となる場合はフィッシャーの正確確率検定を行なった。

カイ二乗検定の結果、「断定」「感想や動機の付け足し」の戦略は嘘のときほど用いられやすく、「推測」「婉曲」「借用」の戦略は嘘でないときほど用いられやすいという傾向が示された(表2)。

表 2 各戦略が用いられたエピソード数と検定結果

戦略	説明	嘘の会話文 (全56エピソード中)	通常の会話文 (全39エピソード中)	検定で違いが みられたもの
断定	「～ありました」「～行きました」など	46	16	○
推測	「～だと思います」「～じゃない」	0	12	○
婉曲	「～感じます」「～みたいな」	8	14	○
ぼかし	「～かな」	6	10	×
借用	質問者の言葉を借用する	0	7	○
言い換え	単語や表現を別の言葉で何度か言い換える	4	4	×
感想や動機の 付け足し	作りあげた感想や動機を嘘の部分に付け加える	12	0	○
繰り返し	一度した説明を再度行なう	3	1	×
その他		5	2	×

5. 参加者と質問者による嘘の共同育成

嘘の会話文が生じる前後のプロセスを見ていくと、質問者に対する返答が重要な役割を果たしていることが示された。たとえば、参加者 B は、第一回の質疑応答場面で、当初「噴水で金魚に餌やりをしている人がいた」という嘘のみをついていた。しかし、質問者による質問への返答で新たな嘘(「餌やりの人が学生課の職員みたいな人だった」「餌やりの方は女性だった」「餌やりの方はすぐに帰った」)を 3 個ついていた。ここから、嘘に嘘を重ねるという行為は、嘘に関して質問をしてくる相手が必要であるといえる。嘘はつく人とつかれる人(本実験における参加者と質問者)による会話のやりとりを通して、初めの嘘よりも大きく、あるいは強く育成されていくと考えられる。

6. 言葉探し

一方、通常の会話文では、言葉探しと呼べるようなプロセスが会話の中に見出された。参加者 A は、「石碑に書かれていた名前の一覧」を上手く表せる言葉を探すかのように、「入学者みたいな」「リストみたいな」「一覧みたいな」の 3 通りの言い方をしていた。また、参加者 B は目的地の 1 つである銅像の色を聞かれ、はじめ「黒」と即答したが、「黒じゃなかった、間違った。銅像の色だから、たしか灰色だったかな。」とすぐに訂正している。その後も言い直しを繰り返し、最終的には、「緑だった気がする」と「緑」に落ち着いた。この事例では、「黒」から始まり、「灰色」、「緑」、「酸化してそうな緑」、「緑」と銅像の色が変遷していた。これらは、嘘の会話ではみられず、通常の会話特有の現象であった。

7. まとめと考察

本研究の結果より、嘘の会話と通常の会話で用いられる戦略に違いがあることが示された。嘘の会話では「断定」「感想や動機の付け足し」といった戦略が多用される傾向があり、あいまいさやためらいが意図的に排除されていた。あいまいさやためらいは嘘の証拠として一般的に認識されている。したがって、参加者はあいまいさやためらいを会話の中で意図的になくすことで、質問者に「嘘なのではないか」という疑いをかけられることを避けて

いたと考えられる。

新たな嘘は質問者が発した質問に返答する形で形成されていた。浜田(2004)によれば、「取り調べ」では取調官の証拠なき確信に基づいた取り調べが虚偽自白という嘘を引き出す。しかし、本研究の結果からは、普段の会話では、聞き手が「嘘に違いない」という確信を持っていなくても話や相手に関心を持つことで、嘘が引き出されるといえる。

通常の会話において、参加者は言葉探しを行っていた。一つの解釈として、語りのもとになっている素材があり、自分が発した言葉を照らし合わせ正誤判断を行なっているのではないだろうか。言葉探しは、実際に自分が見たもの(語りのもと)と自分の発言の不一致、つまり正誤判断で誤りの判断が繰り返し下されることで起こるのではないか。

嘘の会話では、言葉探しや「借用」戦略は使用されず、「断定」戦略を用いて事実(嘘)をありのまま淡々と述べていたことが特徴的であった。これは、森(2008)が示した伝聞体験の語りの特徴と酷似している。森によれば、伝聞体験の語りは、実体験の語りに比べ終始安定したものであり、言語情報や知識を駆使して構成される。本実験における嘘の会話も、伝聞体験と同様に、言語情報を中心に駆使して構成されたといえる。ただし、ここでいう言語情報とは、参加者自身が作りだした嘘の語りの「台本」のようなものと考えられる。

以上のことから、通常の会話と嘘の会話では語りのもととなっている素材が異なると考えられる。高橋・北神(2011)によれば、日常場面の見慣れた物の記憶では、見たままの画像情報が保存されているのではなく、識別が容易な視覚的要素(色や大きさ)が保存されるという。また、視覚的記憶はあまり正確でないことも示されている。つまり、簡易化された画像情報を素材とした想起による語りには、間違いやあいまいさが表れると考えられる。本研究における言葉探しは、通常の会話の語りのもととなっている素材が「簡易化された画像情報」であるがゆえに生じた現象だといえる。したがって、通常の会話は参加者自身が見たもの、すなわち「画像情報」を思い浮かべ語り、嘘の会話は自分で作った「テキスト(台本的なもの)」を思い浮かべ語るという解釈が成り立つ。

7. おわりに

本研究の結果を応用できる場面について考えていく。嘘は、戦略の違いによって通常の会話と見分けることができると分かった。この応用として考えられるのは、事件等の捜査場面だろう。現在の日本の供述調書は、取調官によって一人称が「私」の綺麗な文章に再構成されて記録されている。嘘か真実かを見極める際に、戦略の選択を利用するとしたら、取り調べを受ける人の語りをありのまま記録するように変える必要がある。

また、嘘が話し手と聞き手による「質問とそれに対する返答」というやりとりの中で育成されることが分かった。「質問とそれに対する返答」というやりとりが多く行なわれている代表例が記者会見や取材である。真実を追究するはずの質問が話し手の嘘をより大きくし、話し手があたかも初めから大きな嘘をついたかのように報じられている可能性もある。したがって、社会的場面では質問の仕方については慎重になる必要があるだろう。取り調

べや記者会見のような相手から話を聞き出す場面においては、なるべく質問を控え、相手に自由に語らせることが嘘を大きくしないことにつながりうる。

本研究では、会話の中で嘘が構成されるプロセスを明らかにし、嘘はつく人とつかれる人がいて成り立っていることを示した。今後の嘘の研究に対し、嘘をつく個人の心理のみに注目するのではなく、つく人とつかれる人のやりとりに注目するという新たな視点を示すことができたのではないだろうか。

参考文献

浜田寿美男(2004). 取調室の心理学 平凡社

Mori,N.(2008).Styles of Remembering and Types of Experience: An Experimental Investigation of Reconstructive Memory.*Integrative Psychological and Behavioral Science*, 42(3),291-314.

森直久(2011). 想起による体験への接近 - 社会文化的アプローチから生態子的想起論へ - 京都大学大学院人間・環境学研究科提出博士論文

中村祥一,井上俊(1982). うその社会心理 有斐閣

高木光太郎(2006). 証言の心理学 中央公論新社

高橋雅延,北神慎司(2011).「日常記憶」太田信夫,巖島行雄編『記憶と日常』 北大路書房 208-241.

Vrij,A.(2008).Detecting Lies and deceit: Pitfalls and opportunities 2. Chichester, John Wiley&Sons.